

## 嘉永7年伊賀上野地震に伴う満濃池決壊

松尾裕治(香川大学客員教授)・松本秀應(四国防災共同教育センター特命教授)・村上仁士(徳島大学名誉教授)

### §1. はじめに

2011年の東日本大震災では、福島県須賀川市のため池(藤沼湖)が決壊・氾濫し死者・行方不明者8名の被害があった。著者の住む香川県でも、嘉永7年(1854年)伊賀上野地震後の7月のため池(満濃池)が決壊し、被害が発生した史実がある。しかし、こうした史実は意外と住民に知られていない。地震などの際、過去に災害履歴が地域にあることを伝えるためには「わがごと意識」の醸成が必要とされている。

国土地理院は、昨年から身近な災害履歴を学ぶための学習教材として、自然災害伝承碑等を国土地理院地図に登録・公開し、地域住民や学校等によって活用される情報を発信している。

本発表では前述の取り組みを受け、嘉永7年の満濃池決壊の様子や復興に向けての対応等が記された郷土資料、及び現地調査から、幕末の伊賀上野地震による満濃池決壊の教訓について紹介する。

### §2. 満濃池決壊の歴史

満濃池は、大宝年間(701年~704年)に讃岐の国守、道守朝臣(みちもりあそん)が金倉川をせき止め創築した、日本最大のため池(貯水量1540万トン)である。821年には、かの空海が堤防を改修した記録も残っている。1184年決壊以後は450年間廃絶のまま池内村となったが、1631年に西嶋八兵衛が再築した。それ以降の藩政時代においては、底樋替えを除き、堤防は220年安泰であったが、幕末の1854年にまたも決壊する。このように古代から現在に至る迄、洪水等による数多くの決壊と修復が多く先の先人の労苦とともに繰り返された。

最後の嘉永7年の満濃池決壊について、磯田道史(2014年)は「一八五四年六月の伊賀上野地震は、各地でため池を決壊させた。なんと遠方の香川県の満濃池にダメージを与え、漏水がはじまった満濃池は一ヶ月たらずに決壊した。」としている。地震により決壊したという説は、旧来より多くの町史等にも書かれ、通説化されている。この幕末(1854年7月)の満濃池の決壊は、その後16年間、明治3年(1870年)まで復興されることは無かった。

### §3. 嘉永7年7月満濃池決壊の教訓

自然災害においては被害規模の想定や、その被害発生に直面した際の対応について過去の災害事例(教訓)が参考になる。別所家文書「嘉永七年御用留」には、池守の居宅が流れ死者が出たという簡潔な記録があるが、嘉永7年7月満濃池決壊(芳澤直起、

2015年)によると、「嘉永七(一八五四)年七月の満濃池崩壊を地震が原因とする説は、強烈な地震が発生した結果、満濃池のような巨大なため池をも破壊した。それほど地震は強烈であったと地震の脅威を強調しているが、地震が起こる前に行われた従来の木樋から石樋に変えた新工法が既に問題を発生していた。つまり地震はひとつの契機であり、満濃池が万全ではなかった為崩壊したと考える。」としている。

また、高松松平家歴史資料「靖公実録三」には、「大水となり放出した満濃池の水が、金毘羅の鞆橋を直撃し、さらに金毘羅の町内にも水が押し入り、被害を与えた(図1)。決壊に際し、堤に水漏れが発見された後、即座に役所に通報され、(中略)満濃池の流れ口付近の住民に注意を呼びかけていた為、人馬に怪我等の被害がなかった」とある。決壊時、満濃池周辺の住人達は早々に警戒体制をとっており、その結果、人的被害が最小限に抑えられていたことがわかる。

この「満濃池決壊の教訓」と大雨や地震で満濃池が決壊した場合を想定したハザードマップ(まんのう町公表)を活かし、今後の南海トラフ巨大地震の「ため池災害」に備えることが大事である。



図1「讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図」個人蔵(香川県立ミュージアム保管)(筆者一部上書き)満濃池決壊後の様子が描かれている。池の跡地に金倉川の川筋だけが残っている様子が描かれている。

### §4. おわりに

行政では、東日本大震災以降、ため池のハザードマップを示し、住民に対し日頃から浸水想定区域や避難経路を確認できるように、すなわち迅速な避難行動や災害応急対応を行えるように促している。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という格言があるが、9年前の東日本大震災による藤沼湖の決壊、約160年前の伊賀上野地震に伴う満濃池の決壊、いずれも忘れてはならない。南海トラフ巨大地震に対して、ため池決壊を他人事や昔のことと考えず「わがごと」として備え、もしもの時の迅速な避難行動ができるよう、ため池ハザードマップと惨禍の教訓を活かしてほしい。